Peshawar-kai
ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0003　福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA天神南601号
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

No.150
2021年12月8日

〈URL〉http://www.peshawar-pms.com　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

［写真］木々が育つガンベリ沙漠を背に、植樹したメンバーと中村哲医師（2012年7月10日）

政変前後のPMS	事業再開への道―八月の政変以降の活動報告	ジアウル ラフマン
	地域住民のためのインフラ事業	ディダール ムシュタク
	どんな時でも診療します	ハフィズラー カニ
	不測の事態の中で	モハマド ヨセフ
	タリバン、ガンベリ農場の安全を約束	アジュマル スタニクザイ
「真の人類共通の文化遺産は、平和と相互扶助の精神である」――中村 哲		村上　優
【中村医師の報告から】復興支援の傲慢を思う――アフガニスタン大旱魃の危機		
【中村哲医師×養老孟司さん対談】先進国はアフガンという「田舎」が怖いのだ ②		
【カラー特集】命を脅かす干ばつ		
【カラー特集】PMS バルカシコート堰工事再開!!		
【カラー特集】ガンベリ農場 生産物あれこれ		
【カラー特集】中村先生 雨ニモ負ケズ　～取水技術＆カモの親子～		

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成され、現在は中村医師が設立したPMS（平和医療団・日本）のアフガニスタンでの医療活動や灌漑水利事業等の総合的農村復興事業を支援しています。

ホームページはこちらから▶

飢えている者に必要なのは…

「寒風の中で震え、飢えている者に必要なのは、弾丸ではありません。温かい食べ物と温かい慰めです。これまでのご協力に感謝し、一層の力を尽くしたいと存じます。どうぞ、飢えに瀕した人々と、悪条件の中で働くPMS職員・作業員のためにお祈り下さい。良いクリスマスとお正月をお迎え下さい。」

――中村 哲（ペシャワール会報134号より）

事業再開への道

――八月の政変以降の活動報告

PMS副院長／ジャララバード事務所長　ジアウル ラフマン

親愛なる日本の皆様、いつも変わらぬご支援をありがとうございます。八月の政変に際して、私たちの無事を祈っているという皆様のお気持ちはPMS支援室を通じて届いておりました。いま、私から直接皆様にお礼を申し上げることができて安堵しています。

長老たちとの約束

PMSは、タリバンが南部・北部・西部の州を制圧してアフガン政府軍を退却させた時点で会議を開き、アフガン東部クナール州が制圧されるまでは通常通り活動を続けようと話し合いました。そして同州が掌握された時に様子をみて、今後の活動をどうするか判断することを決めました。現在建設中のバルカシコート取水堰（ぜき）・用水路の現場の対岸がクナール州ヌールガル郡であるため、まずPMSスタッフの安全確保が第一と考えたからです。こうして我々は二〇二一年八月十四日まで通常通りに動いていました。

八月十四日にタリバンがクナール州を制圧しました。その日私たちはバルカシコートでの工事を中断し、レンタル重機はナンガラハル州のオーナーの元に戻されました。PMSの重機や資機材はバルカシコート村の長老に託しました。彼は責任をもってそれらを守り、管理すると固く約束をしてくれました。また、PMSのミラーン灌漑（かんがい）事務所に置いてある車両や大切な道具はジャララバード事務所（本部）に移動させることにしました。しかし、クナール州制圧後、数時間でナンガラハル州も制圧されたため、実行されませんでした。そこで、ミラーン村代表の長老と速やかに約束を交わしたうえで預けました。

ガンベリ農場のトラクターとその他の農機具などは村の代表に託しました。どの長老も預かった資機材を我々に代わって大事

に保管することを約束してくれました。
その日、ダラエヌール診療所での医療サービスは通常通り続けました。

経済制裁による影響

タリバンがアフガニスタン全土を制圧すると、恩赦（おんしゃ）の発表があり、国民に向けて仕事に戻るようにとの呼びかけがありました。これを受け、九月二日にPMSは農業事業を再開しました。ダラエヌール診療所は八月二一日に、すでに再開していました。

バルカシコート堰工事を開始できなかった理由はただ一つ、現金がなかったことでした。灌漑工事はレンタル重機や日雇いの作業員を多く要するため、大金が必要になります。ところが、アフガニスタン国際銀行（AIB）をはじめとするすべての銀行が一旦閉鎖したために、現金が手に入らなかったのです。

九月になって新政権が、NGOと企業はひと月にアフガン通貨で二万五千ドル相当まで引き出してよいと発表したので、私たちも早速九月二〇日に銀行から上限額を引き出しました。一カ月後の十月二一日に再び銀行に行きましたが、「申し訳ないが預金の引き出しは出来ない」と言われました。その後何度も電話をし続けた結果、十月二三日にアフガン通貨で一万ドル分を引き出すことができました。

農業事業からの収入と九月二〇日に銀行から引き出せた分で、工事現場で働く日雇いの作業員たちの賃金を二カ月ぶりに支払うことができました。また十月七日にはバルカシコートの工事や河川観測（水位測定）などを再開しました。重機の燃料を購入できたために、まだ全開とは言えないものの、バルカシコート事業はゆっくり着々と進行しています。

PMSの活動再開にあたっては、まずタ

再開したバルカシコート堰建設。現場では至るところでPMS所有の重機がフル稼働している。（2021年10月28日）

ジャララバード事務所での朝礼。ジア副院長が朝礼挨拶をした後、サーブルジャンが点呼をとり、出欠確認をしている。（2021年10月24日）

バルカシコート取水門で、ナンガラハル州灌漑局のタリバンにPMS方式を説明するディダール技師（右）とファヒーム技師（左から２人目）。（2021年9月21日）

リバン政権下のナンガラハル州農業灌漑局とシェイワ郡長から彼らの事務所に呼ばれました。そこで、ＰＭＳの用水路建設担当のエンジニアと農業事業の責任者が彼らに活動を説明しました。すると、彼らはＰＭＳ事業の視察に来ました。現場を見た彼らは私たちの事業を称賛し、ドクターサーブ中村への多大な賛辞を述べて、いかなる協力も惜しまないと約束しました。

カブールの情勢がほぼ平常に戻ったことを確認した上で、ＰＭＳのドクターサーブ ナカムラ コミッティーのメンバー数名が、タリバン担当官との協議のためにカブールに向かいました。担当官は私たちに事業を再開してもよいと告げ、治安維持への協力を申し出ました。私たちはジャララバードに戻って再び会議を開き、ＰＭＳの全事業を再開することを決定しました。現在、ＰＭＳの全てのプロジェクトは進行しており、他のＮＧＯが全て活動を停止しているなかで、ＰＭＳが活動を続けていることは何よりも意義深いことです。

私たちの日常業務

ＰＭＳの一日は毎朝八時に始まります。朝礼で全職員の出欠確認を経て、それぞれの勤務場所に向かいます。各現場から物品購入の依頼があれば、購買担当がバザールに出向いて見積りを取ります。また、バルカシコートの工事現場とガンベリ及びミラーンの各事務所からのリクエストに応じて、ジャララバード事務所で燃料を専用車に移して現場へ届けます。各事務所は現場職員の出欠と作業員数の確認、現場倉庫のストックの確認をして、ジャララバード事務所に報告します。ジャララバード事務所はこれらの報告書をまとめて日本に送ります。

以上が、私たちの日常業務の内容です。

感謝を込めて、ご報告いたします。

ジャララバード事務所内の給油所。会計担当が必ず立ち会いながら燃料を補給して、現場の重機や車両に届ける。（2021年10月24日）

地域住民のための インフラ事業

PMSチーフエンジニア
ディダール ムシュタク

植樹と水やりは欠かさずに

二〇二一年八月十四日時点では、PMSの活動は全て通常通り行われ、PMS職員や地域の作業員は全員現場で働いていましたが、やがてタリバンがクナール州側からナンガラハル州に進攻しました。

その後、預金が引き出せなくなり、私たちはレンタルの重機とPMS所有の重機使用を一時停止しました。今回の政変で米国がアフガニスタンの全資産を凍結したために、全ての銀行が閉鎖してしまったからです。しかしバルカシコート用水路現場での植樹や水やり、マルワリードⅡ用水路流域の柳のケアは続行しました。私たちは交代で現場に出向き、作業状況の確認と維持管理のために全ての取水口の観察を今まで通り定期的に続けました。

タリバンとの協議

八月二四日、私たちはタリバン政権のナンガラハル州河川局責任者との会議で、PMSの活動について説明をしました。彼らは私たちの活動に深く感動し、たいへん喜びました。そしてドクターサーブ中村の活動と奉仕については聞いていたと言いました。河川局の代表者数名が視察に現場を訪れた時はさらに驚き、感激していました。そして視察を終えた時には、PMSへの協力を約束してくれました。それはPMSがアフガン国民のためのインフラ事業を行なってきたからです。その後シェイワ郡長と面会したところ、郡長もPMSの活動を称賛し、安全を保障すると言ってくれました。

十月四日、マルワリード用水路のH2区で豪雨による鉄砲水が発生し、用水路が砂や砂利で埋まってしまいました。そこでPMSの重機を用いて用水路から堆積物を除去し清掃したところ、再び水が流れるようになりました。

バルカシコート堰の完成を目指して、測量をしながら工事を進めるディダール技師（左）とファヒーム技師（右から2人目）　（2021年11月7日）

2022年カレンダー

「人 水 命」

制作　ペシャワール会／PMS
B3判カラー
写真13点+中村哲医師の言葉
定価1500円（税+送料込）

今年もPMSカレンダーを制作しました。アフガニスタンの人々の生活に焦点を当てた写真に、中村医師の珠玉の言葉を添えています。ぜひお買い求め下さい（ご友人・知人へのプレゼント発送も承ります）。

※お申し込みは同封の用紙で。代金は後払い。払込用紙を同封します。

※ご好評につき、サイズが大きくなりました。

農作物を売って重機の燃料に

米国がアフガニスタンの資産を凍結したために、私たちは銀行から預金が引き出せなくなっています。しかしそのような状況にあっても、干ばつで干上がった農地を考えると、私たちの事業を継続することは大変重要なことです。

そこで、ＰＭＳではガンベリ農場で生産した作物を売り、その代金でまず重機用の燃料を買い、心配していたバルカシコート堰の工事を十月七日に再開することが出来ました。この厳しい干ばつの中、マルワリード用水路の水で生産した農作物のお陰で用水路の工事ができるのは嬉しいことです。

どんな時でも診療します

ＰＭＳダラエヌール診療所 医師
ハフィズラー カニ

タリバン兵で溢れるジャララバード

日本のペシャワール会の皆さま、こんにちは。私は医師のハフィズラーで、ＰＭＳ職員としてダラエヌール診療所で働いています。

今回のアフガン政変と医療組織への影響についてお話しします。

突然のアフガニスタン政権交代でしたが、それがあまりに急に起きたため、私たちにはそれについて考えを巡らす時間すらありませんでした。

二〇二一年八月十四日のことです。診療所にいたところ、ジア先生から電話があり、「ジャララバードの事務所に来て、日本から届いたマスクを明日診療所に運ぶように」と言われました。その日の夕方事務所に到着すると、ワクチン担当者のナシルラーから「今どこにいるのか」と電話がありました。「何事だ」と聞くと、彼は「タリバンがクナール州を制圧し、診療所のあるシェイワ郡の近くまで来ている」と言いました。

翌十五日、家から外に出るとジャララバード市内がタリバン兵で溢れていたので、私は自宅に戻り、ジャララバード事務所からの指令を待つことにしました。大きな政変が起きていました。診療所では職員数名（診療所周辺に居住している職員と遠方の州出身の職員）がとどまって、外傷の治療を求める村民への診療はしましたが、十五日から一般診療は停止しました。

診療所再開と薬品の確保

治安はすぐに安定したので、一週間後の二十一日には診療を再開しました。大勢の患者が受診して、特に女性の待合室は満杯になっていました。

私の住居はジャララバード市内にあり、山岳農村部にあるＰＭＳの診療所へ毎朝通勤していましたが、九月一日にジア先生から、政変でこれからどうなっていくのかまだ分からないので、念のため一日おきに診療所に行くように、との指示がありました。私はそれに従い、診療所に行った時は懸命に業務に努めました。ダラエヌールの住民たちは、これから何がどうなるのか誰にも分からない状況のなか、二四時間無休で開業

ダラエヌール診療所 助産師の診察（2021年10月17日）

しているのは私たちの診療所しかないので、強い不安に包まれていました。

九月末、私たちは十月から十二月分の医薬品をジャララバード市内のバザールで買い付け、ダラエヌールへ運びました。三カ月分の薬を積んだトラックを見た地域の人々は感激し、全住民に喜びの言葉を伝えてまわりました。同時期にカブールからハミドゥラー医師とアーベット看護師も診療所に戻って来ました。

政変後の状況

タリバンがやって来てから治安は良くなりましたが、経済・教育・医療に負の影響を及ぼしています。国民の多くが失業しており、食料品価格が日々高騰していったため貧困に陥りました。現在、女子は小学六年生までしか通学できません（事務局注：その後、五つの州で十二年生までの女学校が再開）。私立の大学は授業を再開して学生が通学していますが、公立大学は今のところ休校になっています。

医療サービスについて少しお話します。他州のことは正確な情報を持ち合わせていませんが、ナンガラハル州では医療サービスはほとんどゼロの状態になってきました。州内には一つの国立病院、二つの州立病院そして五つの郡立病院と百以上の診療所がありましたが、例外なく状況が悪化しています。医師が国外に出たり、給与が支払われていなかったり、薬不足も起きています。世界保健機関（ＷＨＯ）はＢＰＨＳ（保健サービス基礎パッケージ）支援を発表しましたが、まだ実現していません。また、ＥＰＨＳ（保健サービス必須パッケージ）については、新型コロナウイルス感染拡大に対処する計画も予算も立てられていない状況です。

新型コロナウイルス感染症について補足しますと、感染が疑われる患者は以前に比べて減少しています。しかしアフガニスタンでは感染状況について詳細な調査やデータ収集が行われていないので、正確な数は

診察中のハフィズラー医師（2021年10月17日）

診療所の職員の健康を支える料理人（2021年10月17日）

分かりません。またナンガラハル州には新型コロナウイルス感染症センターが一カ所しかありませんが、ここも間もなく閉鎖されることになっています。

最後に、いかなる状況下でも決して私たちを見捨てることのないＰＭＳジャパン（ペシャワール会）本部事務局スタッフそして日本の心優しい皆様に厚くお礼を申し上げます。ＰＭＳがアフガニスタンで活動してきたこれまでの年月において、政権交代は今回が初めてではありません。今までも何度か情勢の変化がありましたが、どんな時でも、皆様がアフガニスタンの人々のために真心のこもった支援を続けてくださっていることに深く感謝いたします。

不測の事態の中で

ＰＭＳダラエヌール診療所　検査技師
モハマド ヨセフ

診療所再開まで

私はタージ モハマドの息子でモハマド ヨセフと言います。ＰＭＳのダラエヌール診療所で検査技師として働いています。

八月十四日、私が診療所で勤務をしている間にアフガニスタン政権に大きな変化が起きました。しかしこれまでもＰＭＳはいかなる不測の事態に直面しても活動を続けてきました。

今回のタリバンによる二度目のアフガン制圧について少しお話をします。

アフガニスタンのいくつかの州をタリバンが制圧しているという話が少しずつ耳に入るようになっていた二〇二一年八月十四日、アフガン東部のクナール州が陥落しました。住民たちは、その日の夜にアフガン治安軍兵士らがジャララバード市に逃げ、なかには拘束された者もいたと話していました。その後タリバン政府が恩赦を発表、受刑者全員を釈放しました。同日、シェイワとダラエヌールもタリバンに制圧されました。

翌十五日朝、診療所に出勤した際にナンガラハル州もタリバンに掌握されたことを知りましたが、私たちは通常通り業務を続けました。同日、ハフィズラー医師はジャララバード市の自宅におり、日本から送られて来たマスクを診療所に運ぶ予定になっていました。しかし状況が変わったため、ハフィズラー医師は自宅に留まることになりました。ハミドゥラー医師とアーベット看護師はジャララバード事務所の指示にしたがってカブールの自宅で待機しましたが、診療所は二一日から再開しました。

タリバン兵も受診

九月に入ると、遠くから通勤しているハフィズラー医師は、用心して一日おきの診療所勤務になりましたが、すぐに通常の勤務に戻りました。私たちの診療所以外は全て閉鎖しています。そして状況が落ち着きを取り戻したため、カブールからハミドゥラー医師とアーベット看護師も診療所に戻ってこれまで通りの仕事に復帰しました。

待合室で採血をしているヨセフ検査技師
（2021年10月17日）

この間にタリバン兵士数名が患者として診療所にやって来ました。彼らは私たちの医療活動に深く感動し、ドクターサーブ中村と日本の人々を称えました。

政変でアフガニスタンの銀行が全て閉まったため、私たち職員へのサラリーの支払いが遅れていました。しかしＰＭＳ本部（ペシャワール会）がいろいろと手を尽くして下さり、給与を頂くことが出来ました。

ダラエヌールの住民たちはＰＭＳにとても感謝しており、いかなる状況下にあっても誠意をもってその任務を果たしてくれると喜んでいます。

最後になりましたが、タリバン政権の郡公衆衛生局長の医師が私たちの診療所を視察に訪れました。その際、私たちが住民に提供している医療を目の当たりにした彼らは、ＰＭＳの医療サービスは素晴らしいと話していました。

傷の治療をするナース（2021年10月17日）

タリバン、ガンベリ農場の安全を約束

ＰＭＳ農業事業責任者・技師
アジュマル　スタニクザイ

タリバンが来た日

タリバンがクナール州を制圧してナンガラハル州に進軍して来た八月十四日、ガンベリ農場ではいつも通り作業が行われ、レイバー（作業員）たちもいつもの時間に終業していました。夕方になると「ナンガラハル州もタリバンに制圧された」と言う人たちがいました。翌十五日早朝には兵士らがタリバンの白い旗を掲げて車や徒歩で市内を巡回していました。この日、カブールも陥落しました。

住民は恐怖を感じ、政府職員らは正規・非正規を問わず全員自宅待機をしていました。自分の身の安全のためにカブールに向かった人たちもいました。やがてタリバンが恩赦を発表し、アフガン国民に向けて職場に戻っても何も問題はないと伝えました。

この間、私たちは連絡を取り合い、ＰＭＳの果樹園・稲田・サトウキビ畑・種苗場・家畜をどう守ったらいいか相談しました。皆と話したことで心が落ち着き、心配することはないという気持ちになりました。

ガンベリ農場ではオレンジ、レモン、マルタ（柑橘類の一種）、ナツメヤシ、米、ト

ガンベリ農場の子牛。搾乳や餌やりなど、牛たちの世話は活動中断時も毎日続けられた。（2021年11月13日）

ナツメヤシ園で、経過観察をするPMS職員。ガンベリ農場で初めて実を結び、喜びもひとしお。（2021年6月26日）

ソルフロッド郡などガンベリ農場から離れた所に住んでいるため、治安などが心配で農場に来られない時期がありましたが、他の現場監督と電話で連絡を取り合って作業に支障がないようにしました。地元の作業員から数名を選び、毎日家畜の飼育や畑への水やりを続行しました。そしてガンベリ農場近くに住み、農場で働いているPMS職員のアルサラ カーンとグラム ハッサン（通称ベラ）が作業の監督と農場全体の見廻り作業のために毎日農場に出向き、ジャララバードで自宅待機している私に携帯電話で報告することになりました。私はその報告を専用の帳簿に記録していったのです。数日後、状況は平常に戻ったので、私たちは農場へ出勤し作業の調整をしました。

タリバン、農場を視察

私が農場の全体の見廻りをして、ガンベリ記念公園内の農業事務所に到着した時、タリバン政権の郡長が友人たちを伴って公園を訪れている姿が見えました。郡長はPMSスタッフや作業員らに労い（ねぎら）の言葉をかけ、自分の携帯電話番号を渡し「何か問題があったら私に電話をしなさい。そして事業を再開する際には私たちに連絡をするように」と言っていました。この出来事をPMSのジャララバード事務所に伝えると、事務所の皆もホッとした様子でした。

その後、私たちはタリバン上層部を訪ね、自己紹介をしてPMSの活動について説明をしました。農場を視察した郡長は私たち

（15頁につづく）

ガンベリ農業事務所で水やりに勤しむPMS職員のベラさん。（2021年9月25日）

ウモロコシ、サトウキビを栽培し、種苗場では様々な苗木を育てています。また家畜の飼育や養蜂も行なっています。

PMSは八月十五日から農業事業も停止しました。農業事業のスタッフの多くはジャララバード市内や、ベスード郡、カマ郡、

命を脅かす干ばつ

アフガニスタンでの干ばつ深刻化の報を受け、各州の様子が分かる写真を現地へ依頼しました。かつて全国からPMSミラーン訓練所に集い、中村医師の下でPMS方式を学んだ各地の研修生たちに呼びかけると、目を覆いたくなるような土漠化した農地の写真が届きました。報道写真の転載と併せてご覧ください。

上：西部バドギス州バーラーモルガーブの乾燥した土地に立つ子ども。この地で最後に雨が降ったのは去年のことだという。（2021年10月15日）　ⓒHoshang Hashimi / AFP https://www.afpbb.com/articles/-/3372663

左：中部ヴァルダク州の乾ききった小水路。厳しさを増す干ばつにより、もう何年も水が通っていないように見える。（2021年10月8日）

下：西部ヘラート州の様子。本来なら米やトウモロコシの収穫時期にあたるが、今年は何の作物も育てられていない。（2021年10月8日）

【報告】PMS　バルカシコート堰工事再開!!

8月15日以降休止していたバルカシコート堰工事が10月7日より再開。経済封鎖により資金の確保に悪戦苦闘している中、PMSガンベリ農場での農業収入により活動再開が可能となった。現在、河に巨礫を投入し、堰長を拡張している。(2021年10月14日)

河を筏で横断するファヒーム技師(写真左)、渉外担当パチャサーブ(中央)、ディダール技師(右)(2021年10月14日)

堰で使用する巨礫の輸送作業。角張った山石は流水の水圧を受けやすいため堰には使用せず、川石または鉄砲水が流れ下る山間部に点在している巨礫を使用する。(2021年10月9日)

護岸法面の柳の挿し木に水やり。作業員がバケツで一本一本、丁寧に作業を行なっている。(2021年10月28日)

ガンベリ農場 生産物あれこれ

PMSも事業を休止せざるを得ない中、ガンベリ農場での農業収入が活動再開に大きく寄与した。アフガン全土を襲う深刻な干ばつの中、農業生産物により活動費の一部をまかなえたことで、PMS職員たちの士気は大いに上がった。

今年の稲作は9.6haで行われ、約40トンが収穫された。うち約36トンが販売され、残りは来期の種籾として保管される。(2021年10月11日)

右：ガンベリ農場の牛舎。毎朝新鮮なミルクがバザールへ出荷されている。今年の4月には19頭、10月には1頭が競売に出された。牛たちはガンベリ農場で栽培しているアルファルファやソルゴー(飼料用モロコシ)を食べ、牛糞は燃料や堆肥になる。(2021年11月13日)

右下：レモン園。柑橘類はPMS農場で大きな収入を生む。今年は直射日光により白く日焼けしてしまうなどの問題も生まれた。今後は上部の枝葉を残すように剪定するなど、改善の余地がありそうだ。(2021年9月13日)

左下：今年は厳しい干ばつが予想されていたため、小麦を貯蔵していた。幸いPMS作業地では水の恩恵を得られているため、バザールへ出荷することとなった。しかし、PMS作業地を一歩外に出ると厳しい干ばつに直面しているのが現状だ。(2021年11月6日)

中村先生 雨ニモ負ケズ

～取水技術&カモの親子～

建設中のミラーン堰にて、中村医師といつものPMS現場メンバー。「どうしても用水路建設に焦点が当てられがちですが、私たちの本領は、繰り返しますが取水技術です。やはり『斜め堰』が最も大きなもので、『気候変動＝水位の不安定＝取水困難・洪水被害＝農業生産低下＝貧困と飢餓』、『その改善は適切な取水技術の導入で可能なこと』、これが日本の人々に訴えねばならぬ最大の点だと思います。（2014年5月17日受信 中村医師の週報より）」（写真：2015年12月23日）

中村先生から届いたほっこりする一枚。「カモの親子が泳いでいますが、お父さんが先頭で、お母さんが子供を見守るように後を追います。事業とは関係ありません。（2016年2月12日受信 中村医師の週報より）」（写真：2016年2月6日）

ガンベリ農場のキャベツ畑。日本で研修を受けた畝上灌漑で栽培されている。
（2021年11月1日）

の訪問を大変喜び、「（タリバンが拠点にしていた）山岳地帯にいた頃から、中村医師のナンガラハル州での支援活動を知っていた。我々は全面的にあなたたちの安全を約束します」と話しました。

この面談の後、作業員全員が安心して職場に復帰し、皆一様に嬉しそうにしていました。

ガンベリ農場の作業詳細

ＰＭＳガンベリ農場での現在の作業は以下の通りです。

●水やり：オレンジ、マルタ、ナツメヤシ、オリーブ、サトウキビ畑など
●雑草取り：果樹園、種苗場、花壇と公園
●植え付け他：オレンジの苗木、柑橘類の接ぎ木
●養蜂：ダラエヌール地方で集蜜中
●畜産：牛四四頭の飼料の準備
●収穫作業：トウモロコシ三・五トン、米四〇・四トン、大粒種のユーレカレモン十五トン、小粒種のチャイナリトルレモン二五トン、サトウキビなど
●種まきの準備：小麦、野菜、菜種
●清掃：圃場Ｅブロックから Ｆブロック間の給排水路一二五〇ｍ、公園

以上が八月十五日からのまとめです。日本の皆様に感謝いたします。アフガニスタンと日本の友好関係が末永く続きますように。

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

＊引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使わせていただき大変助かっております。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

中村哲医師の著作等
（価格は税込）

アフガン・緑の大地計画
Peace (Japan) Medical Services & ペシャワール会
B5判並製・256頁・オールカラー　1700円

好評発売中！
中村医師がNHK「ラジオ深夜便」で語った貴重な証言録が待望の書籍化！
わたしは「セロ弾きのゴーシュ」
中村哲が本当に伝えたかったこと　1760円

天、共に在り　1760円
アフガニスタン三十年の闘い
NHK出版　東京都渋谷区宇田川町41-1　☎03（3464）7311

希望の一滴
中村哲、アフガン最期の言葉
A5判192頁オールカラー　1650円
西日本新聞社　福岡市中央区天神1-4-1　☎092（711）5523

アフガニスタンで考える
～国際貢献と憲法九条～　726円
文庫化しました！
人は愛するに足り、真心は信ずるに足る　アフガンとの約束
中村哲／澤地久枝（聞き手）　1078円
岩波書店　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　☎03（5210）4000

医者、用水路を拓く　1980円
ペシャワールにて　1980円
ダラエ・ヌールへの道　2200円
医は国境を越えて　2200円
医者 井戸を掘る　1980円
辺境で診る 辺境から見る　1980円
石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　☎092（714）4838

医者よ、信念はいらないまず命を救え！
1980円　羊土社
千代田区神田小川町2-5-1　☎03（5282）1211
アフガニスタンの診療所から
814円　ちくま文庫
東京都台東区蔵前2-5-3　☎03（5687）2680

映像記録DVD
荒野に希望の灯をともす
～医師・中村哲の35年の軌跡～
［2021年発売］2970円
アフガニスタン用水路が運ぶ恵みと平和
［'16年発売］2970円
アフガニスタン干ばつの大地に用水路を拓く
［'12年発売］2750円
［企画］ペシャワール会［製作］日本電波ニュース社

「真の人類共通の文化遺産は、平和と相互扶助の精神である」――中村 哲

ペシャワール会会長／PMS総院長　村上 優（まさる）

はじめに

二〇一九年十二月四日に中村哲先生が亡くなられて二年が過ぎました。中村先生の魂と対話し、共に歩んだ二年間でした。中村先生の事業と希望を引き継ぐ具体的な体制も整い、現地PMSと日本側の技術支援チームとの交流も活発化しています。『PMS方式灌漑事業ガイドライン』は現地語（パシュトゥ語、ダリ語）への翻訳も終わり完成を待つのみです。そしてこれらの活動を支えてくださる会員・支援者が、八月の政変以降も増え続けており、私たちを力づけていただいています。心からの感謝を申し上げます。

タリバン政権が復活し、当初は様子をうかがっていた現地PMS職員も三々五々職場に戻って全員が揃い、医療・農業・灌漑用水路事業は全て再開しました。事業再開は現地では朗報として歓迎され、バルカシコート取水堰の工事に着手した際に、地元の長老からジア副院長に「NGOに限らず、様々な事業が止まっている中での再開は他にはない」と感謝の連絡が入りました。

世界によるタリバン政権への経済封鎖は、一九七九年のソ連侵攻に端を発し、近隣国や大国に翻弄され内戦に突入したアフガニスタンを想起させます。その時の二〇〇万人を超える人々の死を繰り返してはなりません。

「水が善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなろうと、他所に逃れようのない人々が人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。内外で暗い争いが頻発する今でこそ、この灯りを絶やしてはならぬと思います」（ペシャワール会報一二六号）という言葉は今でも新しく、私たちを鼓舞します。

経済封鎖とアフガニスタンの混乱

アフガニスタンの政変に関して多くの報道がなされていますが、本当のアフガニスタンの現状――治安が回復し、人々が普通に移動している姿、タリバン政権復活を多くの国民が受け入れていること――は伝わっていません。外国のメディアやアフガニスタンに実際に関与した方々からは、「タリバンを含めた国づくり」という包摂的な視点も出てはいますが、多くの報道や意見は女性の人権や恐怖政治への懸念ばかりが突出しているのも事実です。現地事情は伝わらないまま、全ての責任はタリバンにあるかの如くのメディア報道には偏りを感じます。この冬には多くの人々の餓死・凍死が警告されています。このことこそを伝えるべきではないでしょうか。

米国にあるアフガニスタン中央銀行資産九〇億ドルが凍結され、世界銀行のアフガニスタン復興基金やIMF（国際通貨基金）のアフガニスタン供与金も凍結されています。日本からの送金やアフガニスタンにある銀行からの預金引き出しも困難になっています。九月二〇日になっても、企業やNGOなどは月二万五千ドルまで、それも現地通貨のアフガニでしか引き出せません。それすらも十月からは引き出しが困難となっています。

物価は高騰し、経済活動自体が回らなくなっています。PMSは九月に二万五千ドル分をアフガニで引き出して、作業員の八月分の賃金支払いと三カ月分の医薬品の購入にあてました。薬品は九月末で備蓄が底をつくところでした。用水路事業では重機のレンタルもドル建てなので、依頼ができない状態でした。

国連もこの事態を憂慮し、干ばつで飢餓

が迫っていると、人道支援を呼びかけています。経済封鎖と人道支援。なんという矛盾でしょうか。農業を復興し食糧自給率を上げるなど、国としての最低限度の自立を支援するという発想はほとんど見られません。

オンライン会議を実施――現場からの声

八月十五日以降、現地ＰＭＳとは電話連絡のみでしたが、ようやく十月十三日にオンライン会議が実施できました。ＰＭＳ側は医療、農業、灌漑用水路、渉外、会計や総務などに携わるメンバー十名です。久しぶりに相互に顔を合わせ、メンバーが言葉

現地PMSとのオンライン会議で議論をかわす技術支援チーム

では言い表せない困難を越えて揃っていることに感謝しました。

職員には少数民族の出身者もおり、警戒を全て解くには至っていませんが、タリバンへの恐れは減じてきたようです。カブールでの様子を報告し、経済封鎖のために失業者が増えている現実、パン（ナン）を買いに行くと子供たちが寄ってきて「ナンを」と手を差しのべるのが切なく悲しいと話していました。

以下、会議の概要です。

●まずジア副院長が、給与が八月・九月と払えていない中でも何一つ要求もせずに、事業再開への道筋を模索していたＰＭＳ職員を誇りに思うと話されました。職員一〇四名全員が事業継続のためにＰＭＳに留まっていたのです。当初、政変に不安を抱く職員がいたのは事実ですが、この二カ月の間、事業再開に向けてのタリバンとの交渉や、クリニックに患者として訪れるタリバン政府メンバーと接する中で、徐々に安心が得られてきたようです。

●医師より、他のクリニックは供給できる薬がなくなり、遠方からＰＭＳのダラエヌール診療所に来る患者が急激に増えてきたとの報告。八月までは多かった新型コロナ患者は減ってきたとのこと。中村先生と長年共に働いてきた看護師は、訪れたタリバンの役人にＰＭＳの三五年にわたる活動の歴史を話してきかせ、理解を得たとのことです。

●総務担当者は、タリバン中央政府からのＰＭＳ活動に対する安全保障のレターを求めているが、それはまだ発行されていないこと、州レベルと異なり、旧政権の幹部の多くが逃亡した中央の行政機能は停滞している様子であるとの報告をしました。

●タリバンも灌漑事業への関心が高く、ジャララバードのＰＭＳ事務所を訪れ、「ＰＭＳのような仕事をしていたらもっとこの国は良くなっていた」と評価していました。そこで、バルカシコート堰の二期工事は十月七日にＰＭＳ所有の重機（掘削機二台、ブルドーザー二台、ダンプ四台）を活用、農業収入で燃料八千リットルを購入し、再開に踏み切りました。担当者はバルカシコート堰と用水路を冬期に完成させると意気込みを語っていました。

●農業は医療の次に事業再開を果たし、いまではフル稼働しています。二万本の柑橘類が植えられたガンベリ農園で収穫したレモン、搾乳したミルク、子牛、膨大な植林から得られる薪を販売するなどして一万六千ドルの収入があり、今後も期待されています。ＰＭＳの事業費の一部を自前で賄（まかな）うことは中村先生の計画ですが、実際に用水路事業再開の資金を作ったことは画期的で、報告を聞いた人たちから拍手が起きました。

朝礼後の担当者会議。各部署の担当者が集まり、一日の予定や業務を確認し合う。（2021年10月24日）

鬼気迫る干ばつとの対峙

私たちは現地ＰＭＳとのオンライン会議を定例化しています。農業事業のオンライン研修を企画したり、現在建設中のバルカシコート堰を巡っては、ＰＭＳ技術者と日本側の技術支援チームの検討会なども行なっています。具体的な事業の打ち合わせでは、経済封鎖下での重苦しさはありません。

ダラエヌール診療所は、他の診療所が薬品や人材の不足から機能できないところを補って、診療活動に力を注いでいます。しかしながら、給与の支払い、重機などのレンタル料金の支払いなど難問も山積しています。

マルワリード用水路による灌漑地域は今年も稲刈りが終わり、収穫を喜ぶことができました。しかしそれは今のアフガニスタンでは例外的な「平和」です。多くは鬼気迫る干ばつとの対峙を余儀なくされています。事実、少し標高が上がったところ、ダラエヌール診療所のあるダラエヌール渓谷は、土漠化した畑が大干ばつがあった二〇〇〇年当時そのものの光景で続いています。マルワリード用水路から五〇ｍほどの高さにポンプで揚水しては、という提案がありましたが、経費の面で実行は不可能です。雪解け水も早々となくなり、降雨は少なく、谷間ごとに貯水池を作る方策も今すぐの着手は困難です。

来春の収穫はない

今年は干ばつのため、この地域でも麦の種播きができませんでした。これはすなわち、来春の収穫はないということです。土漠化の進行を前に手をこまねいているのが現実です。まずはこの干ばつに対してあらゆる叡智（えいち）を集結しなければなりません。中村先生は「多少の打つ手が残されておれば、まるで生乾きの雑巾でも絞るように、対処せざるを得ない」と叱咤激励されるでしょう。「遭遇する全ての状況が（中略）天から人への問いかけである。それに対する応答の連続が、即ち私たちの人生そのものである。その中で、これだけは人として最低限守るべきものは何か、（セロ弾きのゴーシュは）伝えてくれる」（会報八一号より）――干ばつに加えて、思わぬところから来た経済封鎖という人為的な圧力のなかで、それでも人々が命をつなぐ営為を支えよ、という中村先生の声が聞こえてきます。

最後に、経済封鎖で困窮したタリバンがバーミアンの仏跡を破壊し、国際的な非難が起きた二〇〇一年に語られた中村先生のことば（『医者 井戸を掘る』より）を紹介します。

「我々は非難の合唱に加わらない。私たちの信仰は大切だが、アフガニスタンの国情を尊重する。暴に対して暴を以て報いるのは、我々のやり方ではない。餓死者百万と言われるこの状態の中で、今石仏の議論をする暇はないと思う。平和が日本の国是である。少なくともペシャワール会＝ＰＭＳは、建設的な人道的支援を、忍耐を以て継続する。（中略）我々はアフガニスタンを見捨てない。人類の文化とは何か。文明とは何であるか。考える機会を与えてくれた神に感謝する。真の人類共通の文化遺産は、平和と相互扶助の精神である。それは我々の心の中に築かれるべきものである」

▼寄付をしてくださる皆さまへ

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願い致します。

中村哲医師の報告から

復興支援の傲慢を思う
――アフガニスタン大旱魃の危機

＊ペシャワール会報七二号（二〇〇二年七月一〇日発行）より

約二〇年前に書かれた中村哲医師の報告を再掲します。現在と状況は異なるものの、アフガニスタンの人々が干ばつと飢饉に苦しんでいた事実に変わりはありません。

二〇二一年現在、過酷な経済封鎖によって困窮の度合いはさらに増しています。厳しい冬を目前に、状況は深刻です。

中村医師は二〇〇〇年以降、現地の干ばつの危機を繰り返し訴えていました。にも拘わらず、国連による制裁と9・11後の混乱によって庶民の命と生活はますます脅かされていました。混乱の責任を旧タリバン政権の「圧政」に帰し、対テロ戦争に賛同した日本や欧米の論調に対し、中村医師は強烈に異を唱えるとともに、その後の政治状況をも見事に予言しています。

中村医師の炯眼は、現在の我々が失ってはならない大切なものを説いています。

ご一読いただければ幸いです。（村上優）

◆2001年度を振り返って

「もう、これくらいで放置していただきたい」というのが、一言で述べ得る感想である。現在のアフガニスタンの状況は、大の大人が寄ってたかって、瀕死の幼な子を殴ったり撫でたりしているのに似ている。この一年間、私たちにとって成果と言えるものは、「情報化社会」が必ずしも正しい事実を知らせず、むしろ、世界中に錯覚をふりまいて、その結果、私たちが振り回されることになるのを身にしみて知ったことである。無理が通れば道理が引っ込む。世界を支配するのは、今やカネと暴力である。

架空の土俵でまともな論理が成り立たないが、敢えて今の楽観的な復興ムードに水を差したいのは、現在の援助の構図自身が、「先進国社会」の病理と、行き詰まりを映し出しているからである。

現実が伝わりにくいのは理由がある。私たちが事実を素直に見る眼を失って、独善的な世界に住んでいるからだ。密閉された情報空間で、話題性のみに振り回され、虚像が実像と混同されるのは恐ろしい。空爆や対テロ戦争と同じ論理で、復興支援のシナリオがまかりとおる。「遅れて貧しい人々を助けたい。その進歩発達を阻んでいた『圧政』から解放され、自由と民主主義がもたらされようとしている。この復興に力を貸すのだ」というのが大方の考えだろう。しかし、これは完全な錯覚である。文明の名において、ひとつの国を外国人が破壊し、外国人が建設する。そこに一つの傲慢が潜んでいないだろうか。

昨年九月、米軍の空爆を「やむを得ない」と支持したのは、他ならぬ大多数の日本国民であった。戦争行為に反対することさえ、「政治的に偏っている」と取られ、脅迫まがいの「忠告」があったのは忘れがたい。以後私は、日本人であることの誇りを失ってしまった。「何のカンのと言ったって、米国を怒らせては都合が悪い」というのが共通した国民の合意のようであった。

だが、人として、して良い事と悪い事がある。人として失ってはならぬ誇りというものがある。日本は明らかに曲がり角にさしかかっている。日本の豊かさは国民の勤勉さだけによるのではない。日本経済が戦争特需によって復興し、戦争特需によって富と繁栄を築いた事実を想起せざるを得ない。そして、富を得れば守らねばならなくなる。華美な生活もしたいが、命も惜しいという虫のよい話はない。殺戮行為を是認してまで華美な生活を守るのか、貧しくとも堂々と胸を張って生きるかの選択が迫られていたといえる。「対テロ戦争」は何を守

るのか。少なくとも命を守るものではなさそうである。

未来を予測するのは、いくぶん怖ろしい。「アフガニスタン」は何かの終局の始まりを暗示している。それが何なのか、一介の医者が述べるには分際を越えるが、レミングの群の行進でないことを祈る。強調したいのは、世の流れから超然と、覚めた目で現実を見透し、我々自身の行方を真剣に考える時期が到来したということである。時流に乗せられて「不安の運動」に身を委ねてはならない。私たちのささやかな活動に意味があるとすれば、世界の片隅で起きた出来事の真実を伝え、いのちへのいたわりを思い起こし、以って吾が身を省みるよすがとすることであろう。

◆2001年度の概況

二〇〇一年度はペシャワール会が始まって十八年目、最も激しくゆれた年であった。昨年度報告で述べたように、アフガニスタンの未曾有の旱魃（かんばつ）は収まらず、国際社会の圧力でアフガニスタンは孤立していた。既に二〇〇〇年五月、WHO（世界保健機関）は、繰り返し「アフガニスタン大旱魃」の危機を訴え、被災者一二〇〇万人、飢餓に直面する者四〇〇万人以上、餓死線上にある者一〇〇万人以上と発表していたが、国際的な注意を喚起できなかった。

二〇〇一年二月には、国際支援どころか、国連制裁が発動され、外国のプロジェクトは殆どが引き上げられた。飢餓難民が首都カブールにあふれ、旱魃地帯の農民たちは続々と村を放棄して難民化していた。東部の限られた地区ではあったが、私たちPMSは、砂漠化が進行する中、飲料水確保に全力を挙げ、かつ医療活動もかつてなく広大な地区をカバーせざるを得なかった。

政治的には、旧タリバン（イスラム神学生）政権が国土統一を進め、全土の九割を掌握、北部の戦闘地区を除けば、大旱魃にもかかわらず、過去最も治安が安定していた時期であった。北部の軍閥（マスード、ドスタムら）は、かろうじて外国の武器援助で命脈を保っていたのである。もともとタリバン勢力は東部・南部のパシュトー部族と親和性が強く、それもアフガン農村社会を基盤とするものであったから、西欧化した都市中産階級には受けが悪かった。だが、アフガニスタンの九割が農民か遊牧民であることを考えると、農民や都市貧困層の間では、さして嫌われていたわけではない。それどころか、タリバン政権の基盤は、各地域の伝統的自治組織ジルガ（長老会）による支持だったのである。かくて、報道と情報の偏りが「極悪非道の狂信的集団・タリバン」という虚像を作り上げ、「人権」活動家の格好の標的となった。

九月十一日のニューヨークのテロ事件によって国際社会は、衝撃のあまり、短絡的な「アフガン空爆＝タリバン殲滅」という米英の軍事政策に引きずられた。この恐るべき情報統制による影響については言及しないが、結末は悲劇的であった。六千名の死傷者だけでなく、冬季に移動できぬために餓死に直面した者がどれだけいたか、ただその膨大な数に戦慄しながら想像をめぐらすのみである。

十一月にカブールが陥落すると、たちまち無政府状態が現出した。タリバンは秩序正しく短期間に姿を消した。逮捕されていた外国人ジャーナリストや宣教団体の者も、律儀にトルハム国境まで無事に送り返された。その規律は驚嘆すべきだった。その後ニュースを賑わせた派手な空爆や「掃討作戦」の成果のほどは分からない。カブールにはISAF（多国籍治安維持部隊）が進駐し、かろうじて点と線の治安を維持している。二〇〇二年二月東京で開かれた「アフガン復興会議」では、「自由とデモクラシーによって解放されたアフガンの再建」というシナリオが希望をふりまいたが、現実は安定から程遠いものであった。

パキスタンもまた、米英の圧力に屈し、辛くも国家分裂の危機を切り抜けたが、二〇〇二年五月、カシミール問題をめぐって、対インド関係が核戦争の危機を孕（はら）むまでに緊張した。パキスタン民衆の心情は宗教感情を背景にますます先鋭化していると云えよう。アフガン国境のパシュトー人自治区

では、米軍の直接軍事活動が拡大するにつれ、反米感情がますます高まっている。

これと同時に起きた「アフガン復興援助ラッシュ」が破壊的に作用して、庶民の生活を圧迫している。すなわち大方のNGOがカブールに殺到し、異常な物価高騰を招いた上に、主にパキスタン側（ペシャワール）から半ば強制的に行われた「難民帰還計画」が六月十五日までに一〇〇万人に達したからである。彼らはもともと旱魃から逃れてきた出稼ぎ難民が殆どであったから、荒廃した故郷に帰れず、カブールなどの大都市にあふれた。この不自然で急激な人口増加が需要供給のバランスを一挙に壊し、物価高騰を招いた。UNHCR（国連難民高等弁務官）自身が、率直に「早すぎた難民帰還」を認めている。

六月十日に始まったロヤ・ジルガ（国民大会議）では、米英の推すカルザイ政権が認知されたと伝えられたが、事はそれほど簡単なものではない。米英の軍事プレゼンスが去れば、政権は確実に危うくなる。国軍が創設されれば、その国軍が反旗を翻すことも起りうる。現在のところ、戦に厭きたアフガン民衆は沈黙しているが、先行きの不透明さを皆が感じている。英軍でさえ撤退の兆しを見せている。アフガン復興はいばらの道だと言わざるを得ない。

皮肉なことに、このめまぐるしい情勢変化で、ペシャワール会の活動は過去最大規模となった。即ち、二〇〇一年三月のカブール五診療所の開設、東部旱魃地帯での水源確保事業、緑化計画、そして空爆下の食糧配給計画と、文字通り死闘の連続であった。だが、復興援助ラッシュの影響と、地方の無政府状態で管理が困難となり、二〇〇二年六月、カブールからの全プロジェクトを撤収、東部地区に集中する方針に切り替えた。

中村哲医師×養老孟司さん（解剖学者）対談
先進国はアフガンという「田舎」が怖いのだ ②

＊『ニッポンを解剖する　養老孟司対談集』（講談社／２００６年刊）より許可の上、転載しました

「そこまでせんでいい」日本という国

中村　ぼく、たまに東京なんかに来ると、こういう都市世界はあまり長続きしないんじゃないか、という気がするんです。こんなことをいうと、オカルト的に聞こえたり、募金が集まりませんので、黙っていますけど（笑）。人間が完全に自然から遠ざかって、メンタリティがすっかり都市化してしまった。それこそ、ボタン一つで、なんでもできると思っている。養老先生も昆虫採集をされていますけど、私も昔、昆虫少年だったんです。虫だって、重要な環境の要素でしょう。それを、「汚い」といって、徹底的に都市空間から排除しようとする。ハエ一匹をみんなで追いかけ回して、たたき落として。一匹ぐらい、いいじゃないかと思うんですけど。

養老　ぼく、よくブータンに行くんだけど、テーブルがハエで水玉模様になっていますよ。

中村　日本では、ナメクジが出ただけで大騒ぎしたり。

養老　あれ、追いかけてこないけど。

中村　いまの若者に「バイ菌とも仲良くしろ」というと、だいたいポカンとしますけど、回虫だって、そんなに害はないんです。それを強迫的、神経症的に撲滅（ぼくめつ）しようとして。

養老　アフガニスタンでは、病気はいかがです？

中村　都市も含めて、九割近くは感染症と

外傷ですね。腸管感染症が多いんです。脱水症状さえ防げば、それで死ぬことはほとんどない。子どもが下痢したときは、砂糖と重曹と、わずかにカリウムなんかを入れて、お湯で溶いて飲ませると、だいたい命はとりとめます。感染症で致命的なやつ、たとえばマラリアや腸チフスはちゃんと治療しますけど、ほかのは、まあ、死なないようにしておけば、当たり前だけど、助かるという。

養老　なるほど（笑）。

中村　いま、日本では、感染症で死なすと訴えられたりするでしょう。

養老　いや、かかっただけでも、訴えられますよ。

中村　仕方ない場合もあるんですけどね。アフガンではソ連軍が撤退した後、一時、難民がドッと農村に帰ったことがあるんです。水田が復活して、蚊が大発生してマラリアが流行した。このときは、犠牲者が六千人出ました。それで、何年か前に、日本で例の大腸菌O157の騒ぎがあったとき、ぼく、たまたまこちらに帰っていたんです。新聞の一面に、毎日、でかでかとニュースが出るんで、いったい何千人死んだのかと思ったら、亡くなった方には失礼ですが、二桁いなかった。

養老　日本の場合、なにもかも、きちんとし過ぎちゃったんですね。ぼくの住んでいる鎌倉の駅にコーヒーを出す売店みたいなところがあって、そこのオバサンが、「近ごろ、お客さんの機嫌が悪いんだよ」ってボソっというから、「電車が時間どおり来るからだよ」って答えたの。つぎ何分、つぎ何分とやられたら、そりゃ、疲れてイライラしますわ。明日にならなきゃ来ないかもしれないと思えば、「今日は来なかった」って、コーヒー飲んで帰るんだ。

中村　私は九州ですけど、地元では、そういうのを「せからしかー」っていうんです。うるさいとか、そこまでせんでいいじゃないか、という意味で。電車に乗っても、こっちは静かに外の景色を見ていたいのに、五分遅れただけで、「お忙しいところ申し訳ありません、お客さまが倒れられましたので、予定時刻を五分……」ってアナウンスが入る。車掌さんが悪いわけじゃないんだから、謝らんでもいいと思うんですけど。

養老　たまにいったらいいんだ、「電車は遅れることもあります」って。ぼく、あんまりやかましいことをいう人には、「自分の告別式の日、知ってる？」って聞くんです。ほんとになにもかも予定どおりにいくと思うなら、いつ死ぬのか教えてくれ、って。

中村　余分なエネルギーを使っているんですよね。それで、少しでも予定と違ったり、思いどおりにいかないと、耐えられない。ちょっとしたことで人を殺したり、自殺したり。

養老　「ボタンを押したのに、相手が動かない」って。

アフガニスタンのほうが日本より自由

養老　ぼく、日本人も都会にしがみつかずに、田舎へ行って働いたらいいと思うんです。これ以上体を使わずにいると、ほんとうに人間がへんになっちゃうから。

中村　都市化したとはいえ、日本にもまだ「過疎」という名の田舎はあるわけですからね。徴農制みたいなのを布いて、田植えだの、稲刈りだのさせたらいい。やっぱり自分の食べるものを自分でつくらないとダメだと思うんです。日本ではあのピラピラッとした紙切れ、お札を出せば、なんでも手に入るという妙な錯覚があるでしょう。アフガニスタンは対極で、自給自足を原則に、地域ごとに生活必需品をつくり出しているんです。それでも足りないローソクやマッチは、物々交換で手に入れる。あんな紙切れをもっていたって……。もちろん、カーブルのような都市ではそれがないと食べていけないから、人もお金に執着がありますけど、農村部では、むしろ土地のように実際に生産につながる、目に見えるものに価値を置くんです。そのほうが、ずっと健全だと思うんです。

養老　アジアの農村は、だいたい自給自足ですよね。農業、牧畜、機織りまで自分でやる。日本もかつてはそうだったのに、五〇年ちょっとですっかり変わっちゃった。こ

れは世界全体の問題でもありますね。世界じゅうの人が、都会の人間になるわけにいかないんで。

中村　だれかが食べ物をつくらないと。

養老　人類がそれに気づくのに、あと一〇〇年か、二〇〇年必要でしょうね。逆にいうと、そのくらいで、いまのシステムがもたなくなる（笑）。

中村　私、そんななかでも、アフガニスタンだけは、これからも完全には変わらんだろうと思うんです。もちろん、いまのように混乱した状況は、そう長く続かない。みんな、米軍が弱るのを待っていますから。でも、基本的な人の暮らしは変わらないだろうと思うと、非常に落ち着きます。ただ、問題は水がないことで、これは正直、きびしい。アフガン人は、自然の恩恵だけじゃなく、きびしさについてもよく知っていて、それとどう向き合っていくかが大問題なんです。しかし、こういっては本人たちには失礼かもしれませんが、私は、そういう生き方のほうが自然な感じがするんです。

養老　アフガニスタンには一度、行ってみたいんですけどね。ただ、木がないから、虫捕りには向かないかなと。

中村　いや、でも、面白いのがいますよ。あのあたりは、モンシロチョウのふるさとでしょう。パキスタンからアフガニスタン、ヒンズークッシュ山脈の北部、パミール高原のあたり。私が山岳会の隊員として最初にアフガンに行ったのも、あんな標高の高いところに、ほんとにモンシロチョウがいるのか、すごく気になったからなんです。たしかにいました。種は少ないですけど、あんな痩せ地にも、動物や昆虫がいろいろいるんです。

養老　また、すぐ帰られるんですか。

中村　ええ。

養老　現場監督に。

中村　現場監督、設計技師。重機の運転が多いんですけど、いやぁ、爽快ですよ。これまでに五万発ぐらい、発破作業をやりました。日本であんなことをしたら、道路交通法違反と自然破壊なんとか法違反ですか。落ちている地雷を拾ってきて、火薬をかき出して、ダイナマイトの代わりに使う……これは爆発物取締法違反（笑）。水路ができるというんで、いま難民化した人たちがどんどん帰ってきて、一緒に働いているんです。ちょうどわれわれの水路と米軍の軍用道路がぶつかるところがあって、双方の担当者が衝突しているんですけど、「いまは事を構えるな、水が通るまで我慢しておけ」なんていって。でも、みんな期待して帰ってくるわけですから、責任はひしひしと感じています。

　養老先生は別の意見をおもちかもしれませんが、私は向こうにいるほうが健康で、気持ちもスカッとしているんです。日本に帰ると、「先生、二〇年もあんなところにおって大変ですね」といわれますけど、少なくとも私には、あちらのほうがずっと自由な世界に思えるんです。

（終わり）

養老孟司（ようろう・たけし）　1937年、神奈川県鎌倉市生まれ。62年、東京大学医学部卒業後、解剖学教室に入る。67年、同大学院医学系研究科基礎医学専攻博士課程修了。その後、同大医学部教授となり、95年に退官。東京大学名誉教授。その興味の範囲は、科学、自然、思想、教育、文学と広範囲に及ぶ。

PMSの動き

9月20日　制限付き（25,000ドル相当のアフガニ／月）で銀行から預金の引き出しが可能になる。

10月2日　時間短縮で作業していた農業事業を通常通りに再開。レモンなどの農業収入が入る。

10月7日　一時停止していたバルカシコート堰建設を再開。

10月21日　滞っていた職員への給与を支払う。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

＊ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は事務局にご連絡下さい。パンフレットはA3変形を四折りしたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております。
（ポスティング等は御遠慮下さい）

●事務局だより

＊一昨年の十二月四日、事務局ではボランティアが集まって会報一四二号の発送作業に勤しんでおりました。そこに、中村医師凶弾に倒れるとの速報が入ったのです。茫然自失、先生の最後のメッセージ「この仕事が新たな世界に通ずることを祈り、真っ白に砕け散るクナール河の、はつらつたる清流を胸に、来たる年も力を尽くしたいと思います」が涙でかすんでしまったことを思い出します。この二年間の温かいご支援、ありがとうございました。

＊COP26の開催にちなんで、国別の年間一人当たり二酸化炭素排出量を調べました。米国が十五・二トン、日本は八・七、中国七・四、温暖化による干ばつに苦しむアフガニスタンは〇・二（二〇一八年のデータ、世界銀行のHPより）。アフガン東部の温暖化は過去六〇年で一・八度の気温上昇、他地域の二倍の速度で進んでいるという報告もあるようです。

十一月上旬、BBCが、アフガンを訪れたWFP（世界食糧計画）のビーズリー事務局長のインタビューを配信しました。ビーズリー氏は「人的な理由で（米国による経済制裁のことか）アフガンは地球上でもっとも破局的な状況になっている。九五％の人々が十分な食料がなく、この六カ月で二三〇〇万人が飢餓に直面している。世界の指導者に言いたい、このまま数百万人も亡くなっていいのか」と述べています。中村医師が言う「パンを欲しがる飢えた子どもに石を与えている現実」を私たちは直視しなければなりません。

＊「現地農法は、日本の昭和三〇年代のよき農村の風景を思い起こさせます。中村先生ありがとう。現地、頑張れ！」とのお便りを戴きました。中村医師の事業が継続され、用水路が各地に築かれ、「よき農村の風景」が拡がることを願ってやみません。引き続きのご支援をよろしくお願い申し上げます。

皆様のご健勝と二〇二二年が平穏な年でありますよう、お祈り申し上げます。

●PMS支援室より

＊八月以降、現地では治安が良くなったとお伝えしても信じられないかも知れない。中村先生たちが造った用水路が壊されるのではないかと尋ねられることも多くなった。しかしながら、二〇〇一年十月から二〇年間続けられた空爆、ドローンや戦闘機の飛来がこの八月三一日以降無くなったことを思うと、アフガンの人々は静寂な空をほっとした気持ちで眺めているのではなかろうか。

一方、今年の干ばつは厳しく、餓死に瀕する約一千万人を前にアフガンの資産凍結が続けられている。経済封鎖の中でも中村医師が二〇年間訴え続けた干ばつは進行しているのである。

二〇〇一年のボン会議以降、アフガン復興支援が二〇年間行われたが、干上がった畑と餓死・飢餓に直面しているアフガニスタンの人々が今、厳冬の地に残されている。

㋫村から

＊中村先生から支援室に伝えられた教えの一つに「できるだけフィールドワークで学習する機会を持って、自然を体で体験すること」があります。山田堰や緑川の石出し水制を始めとして、様々なフィールドワークに行く中で、見て聞いて、触って嗅いで、体を動かすことを繰り返すうちに、聞いたことをただ知識にしておくことと、実際に自分の体を使ってやってみる・感じることは天と地ほどの差があると、骨身に沁みて実感するようになりました。特に、ボスに「においや味を感じた方が植物の種類を覚えやすいよ」と教えられてからは、木の実がなっていたらとりあえず口にしたり、花や葉っぱの香りをかいだりすることがクセになっています。

そんな中、ガンベリ農場の柑橘の剪定に触発されて、実家の樫の木の剪定をしました。家族に教えてもらいながら自分で鋏を持って初めて、こういう枝を切るのか、ここは切ってはいけないのか、と考えることができました。我ながらなかなか上手くできたので、大いに僭越ですが、アジュマルジャンとどっちが綺麗に剪定できるかを競ってみたいと思ってしまいました。

（PMS支援室　浦田菖平）

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州（現カイバル パクトゥンクワ州）ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局を
〒八一〇―〇〇〇三　福岡市中央区春吉一―一六―八　VEGA天神南六〇一
℡〇九二―七三一―二三七二
内におく。

総会、現地報告会は原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。

発行●ペシャワール会　〒810-0003　福岡市中央区春吉1-16-8　VEGA天神南601号　会長 村上優
電話　092（731）2372　FAX　092（731）2373　ゆうちょ銀行振替口座　01790-7-6559
発行日　2021年12月8日　No.150